



わがいのちすなわち無量寿なり

学校長 飯山 等

想えば、皆さんにとって3年間の高校生活は、この感染症に大きく規定されたものとなりました。当たり前のことであった登校が突然禁止された日々、孤在のまま受けるオンライン授業。

大きな制約のもとでのクラブ活動。研修旅行、学園祭の中止。そして日常の友だちとのあり方など。受けざるを得なかった影響は計り知れません。でも、人為、自然の不如意に傷つき、翻弄されても、なお生きることを前に進めてきたのが人間の歴史です。大きく視野を拡げれば地球の38億年のいのちの歴史でもあります。そのように、つながれてきたいのちとしての尊さを受けとめ、つないでいくいのちの意味、つなぎあう身としてのありがたさを、あらためて、その一人ひとりとして、かみしめて歩んで行きたいと思います。ほかならぬこの現在は、そのように歩んできた、先なるいのちの不断の歩みによって恵まれた^{いま}現在だから、と思うことです。

東京に住んでいる次女がこんな話を聞かせてくれました。「4歳になった長男の暢隆が、自分のことを盛んに「おれ」と言うようになった。教えていないのにね。おもしろいね」と。それまでは自分のことを「のぶくん」とか「のぶ」と言っていた彼です。通っている保育園で、同じ年齢のクラスの友だちが言っているのを自然な思いで受容したのでしょう。わたしも含めて、皆さんも、私のことは「わたし」「ぼく」と言い、自分の名前と言う人はいないと思います。暢隆君も、その私たちの仲間になったのです。

「のぶくん」と「おれ」とは、それぞれどのような名乗りなのでしょう。前者は先ずは呼びかけられる名としてあり、そのことによって、時を経てやがて私の名乗りとなったのです。だから、「のぶくん」という名は、先ず呼びかけられる私であった。もし、そのように呼びかけられるという時を持たなかったならば、そのように「のぶくん」と名乗る私は生まれることがなかったでしょう。その、言わば因時としての時を持つことによって、「のぶくん」という名乗りをする私が生まれたのです。「おれ」が生まれる以前から生きられた、さいしょの存在の名告りなのです。それに対して後者は、生まれてからまったくそのように呼びかけられることはなく、あるとき、私から発せられる自称としてなされる名乗りです。誰も、私に対して「おれ」と呼びかけることはありません。私のことを「わたし」「ぼく」と名乗る世界に身を置くという事実が、私にもたらすことになった名乗りです。前者

が、大きく言えば、世界発の、世界の側からの呼びかけとしてあり、それに応じて生まれ出てきた名乗りであるのに対して、後者は、自心発の、世界の側に向けられた発語です。

それを成長です、と素直に喜ぶことを躊躇う私がいいます。それは、どのような意味で成長なのか、もっと思いを強めて言えば、果たしてそれは成長なのか、との思いに沈む私がいいます。そこから妄想が膨らみます。もし私が父母によって、「わたし」と命名されたら、私はどのように自身を、そして世界を認識するのだろうか。この世界に生まれた私は、周りから「わたし」と呼びかけられ、やがてその時の恵みを受けて、「わたし」と発語する。「飯山わたし」。「わたし」は世界からの呼びかけとしてあり、呼びかけられる「あなた」の名として、私にある……。頭がくらくらしてきたので、こころで妄想に蓋をします。

神戸の長女夫婦に恵まれた新君のことです。3歳のとき、保育園のお友だちのお母さんが大きくなったお腹を抱えて、「新君もお母さんのお腹から生まれてきたんだよ」と話してくれました。新君は家に帰ってお母さんに聞きました。「あらたは、おかあさんのおなかをやってくるまえは、どこにいたの?」と。娘からその話を聞かされた私は、とても大事なことがそこで問われていると強く心に残りました。しばらくして、お母さんは次子を身ごもり、お腹が大きくなってきました。新君はもうすぐ5歳になります。私はその彼に訊きました。「この赤ちゃんはどこからやってきたのかなあ?」と。彼はあっざりと言えました。「おかあさんのおなかでおおきくなるんじゃない?」と。彼は、もう私たちの世界の住人になっていました。私は大事な問いが宙吊りにされたようで、ちよびりさびしくなりました。

蓮如上人が大切にそこから教えを聞き続けられた聖教に『安心決定鈔』があります。そこに「阿弥陀の御いのち」という印象的な言葉があります。『帰命の義もまたかくのごとし。しらざるときのいのちも、阿弥陀の御いのちなりけれども、いとけなきときはしらず、すこしこざかく自力になりて、「わがいのち」とおもいたらんおり、善知識「もとの阿弥陀のいのちへ帰せよ」とおしうるをききて、帰命無量寿覚しつれば、「わがいのちすなわち無量寿なり」と信するなり』。もとのいのちに帰する。そこに「わがいのち」という想いの小ささは破られて、「御いのち」としての、ひろやかな開放と謝念に充たされる。そのようないのちの真実を教えてください。私にとっても大切な教示になっています。「本当に自分のものだと思っていたものが実はもらったものだった」(宮崎駿)